



Title	Reenchanting Folklore : Aporia and Creativity in the Works of Zola Neale Hurston, Toni Morrison, and Ishmael Reed
Author(s)	田中, 千晶
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58814
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	田中 千晶
本籍 (国籍)	
学位の種類	博士 (言語文化学)
学位記番号	甲 第 74 号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	Reenchanting Folklore : Aporia and Creativity in the Works of Zola Neale Hurston, Toni Morrison, and Ishmael Reed
論文審査委員	主 査 教 授 渡 邊 克 昭 副 査 教 授 菅 原 邦 城 副 査 教 授 貴 志 雅 之 副 査 教 授 田 邊 欧 副 査 城西国際大学 風呂本 惇 子

論文の内容要旨

〔序章〕アフリカン・アメリカン文学とフォークロア

アフリカン・アメリカン文学において、フォークロアが用いられることについては、過去への郷愁や文化遺産の豊かさの強調という見方が一般的になされてきた。本論では、フォークロアの中では、善と悪、生と死、現実と非現実の境界が明確ではないことに着眼し、これまでの先行研究においてあまり言及されることのなかった、現実では不可能なことが可能になるフォークロアが、現実の物語を描いた文学の中に書き込まれた時にテキストに生み出される曖昧性について考察していく。本論の目的は、口承によって伝承されてきたフォークロアが、文学の中に書き込まれたとき、テキストがどのように曖昧な空間へと変容されていくのかを明らかにしていくことにある。

〔第1章〕テキストの攪乱——フォークロアが創造するアポリア

本章では、序章で論じた本論の目的を、ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアが説明している、口承性と文字言語の間の「アポリア」を用いて具体化する。ゲイツの「シグニファイニン(グ)」は、アフリカン・アメリカン文学の間テキスト性を分析するための批評用語として正典化されている。本論では、この「シグニファイニン(グ)」を、アフリカン・アメリカンのフォークロア「シグニファイニング・モンキー」の猿の行動に基づいて、「攪乱を起こすために、2つのものをぶつけ合わせる」と再定義する。以下の章では、5つテキストの中で、フォークロアと文学がどのようにぶつけ合わされ、そのことによって創造されたアポリアが、どのように読者を攪乱するのかを考察していく。

〔第2章〕ヴァナキュラーの再コード化——ゾラ・ニール・ハーストンの『驢馬とひと』における曖昧性

これまでの先行研究においてフォークロア集とみなされてきた本作品は、アフリカン・アメリカンの文化遺産の豊かさを描いている点において評価される一方で、序章の曖昧性や、Part

IとPartIIとの不統一、最後に挿入されているフォークロアが読者を困惑させることが指摘されてきた。語り手のパフォーマンスや聴衆の反応が書かれているフォークロアとフォークロアの間の記述においては、最初は明確に区別されてきた書き手と語り手の境界が徐々に曖昧になっていく。また、序章に記述されている、アフリカン・アメリカンの声の二重性を利用して、白人読者を攪乱するという彼らの「理論」の公表は、このテキストの真と偽の境界を曖昧にする。このような攪乱は、フォークロアを文字に変換するという語り手の試みが、一方で、ハーストンがアフリカン・アメリカンの言説の特徴として記述している、非対称・非均一というヴァナキュラーを再コード化することでもあることを明らかにする。

〔第3章〕〈帝国〉への逆襲——トニ・モリソンの『タール・ベイビー』における隠蔽されたフォークロア

ジャディーンとサンとの恋の物語とみなされてきたこの作品は、都会と田舎、男性と女性、白人とアフリカン・アメリカン、成功と失敗、という二項対立にあてはめて考察されることが多く、その評価は低い。しかし、感情的である一方で、冷静沈着に十字架館の支配関係を批判するサンの矛盾は、この作品の中に「タール・ベイビー」に加えて、もう一つのフォークロア「歌う骨」が隠蔽されていることを示唆する。このとき、タイトルとして用いられている「タール・ベイビー」が、アメリカがいかに他国を蹂躪してきたかを糾弾する言説から、読者の関心を逸らすための畏となっているという、新たな「タール・ベイビー」物語が立ち現れる。さらに、『タール・ベイビー』を次作『ピラヴィッド』の序章として位置づけることで、『タール・ベイビー』に隠蔽されたフォークロア「歌う骨」は、これまで、主として過去の記憶の継承、歴史の再構築という視点から考察されてきた『ピラヴィッド』における奴隷制度が、ネグリ＝ハートが現代の権力のネットワークとして定義している「帝国」のピラミッドの頂点に立つアメリカの残虐行為を暴き、その「帝国」の正義に対して異議申し立てをすることで、その「帝国」に逆襲することを明らかにする。

〔第4章〕「信用できない知識」の再魔術化——トニ・モリソンの『ソロモンの歌』におけるアボリアの創造

ミルクマンが最後に飛翔するこの作品の曖昧性については、多くの批評家がすでに指摘している。本章では、人間の飛翔とそれを「信用できない知識」とみなす科学的な思考とをぶつけ合わせ、テキストの中にアボリアを創造することを、読者を攪乱するためのモリソンの戦略として考察する。さらに、この作品に書き込まれたもう1つのフォークロアである「ライナの物語」は、飛翔によって残された者たちの苦悩に光を当てるとともに、飛翔という文化遺産を受け継ぐという責任を果たす行為が、社会で果たすべき責任を放棄することになるという新たなアボリアをつくりだす。この攪乱は、ジョージ・リッツアーの指摘する魔術化、脱魔術化、再魔術化という概念を使って次のように説明することができる。ミルクマンの飛翔を文学作品の中に書き込むことは、飛翔という魔術を文字言語に変換することによる脱魔術化である。しかしながら、この脱魔術化によって、読者は現実と非現実との間で宙吊りにされるために、その飛翔はテキストの中で再魔術化される。再魔術化された「信用できない知識」としてのミルクマンの飛翔は、その曖昧性に読者を引き付け、このテキストの中に書き込まれた、公民権運動の中の重要な事件や、1960年代のアフリカン・アメリカンの状況、白人への批判から読者の目を逸らせることになる。

〔第5章〕「比較の亡霊」を呼び起こす——ゾラ・ニール・ハーストンの『わが馬よ、語れ』におけるヴードゥーの表象不可能性

旅行記、もしくは日記として取り扱われている本作品は、ヴードゥーの説明と、語り手のハイチやジャマイカの政治や歴史に関する言及が混在しているために、批評家から酷評されてきた。しかしながら、口承で伝承されてきた、秘密性の強いヴードゥーを文字にして書き記すという語り手の取り組みに着眼した時、このテキストは、語り手のヴードゥーの表象不可能性との闘争の場となる。さらに、アメリカ人であることと、アメリカにおいてはハイチやジャマイカの人々と同様に周縁化されたアフリカン・アメリカンであることとの間の語り手の揺らぎは、語り手の前に、ベネディクト・アンダーソンのいう「比較の亡霊」としてのアメリカを呼び起こす。ヴードゥーを書き記す語り手の試みもまた、脱魔術化されたアメリカに生まれ育った語り手による、ヴードゥーを文字言語に変換する脱魔術化として説明することができる。この脱魔術化は、ヴードゥーの表象不可能性のために失敗に終わり、その結果として、ヴードゥーは、テキストの中で再魔術化される。再魔術化されたヴードゥーの、現代社会における科学技術との親和性は、脱魔術化したはずの現代社会が、実は再魔術化された世界でもあることを明らかにする。さらに、その親和性は、このテキストを読むわれわれの前に、現代社会という「比較の亡霊」を呼び起こし、その亡霊は、われわれに「進歩」を語り直すことになる。

〔第6章〕「マンボ・ジャンボ」の再占有——イシュメル・リードの『マンボ・ジャンボ』におけるパルマコンとしてのジェス・グルー

本章では、この作品を、パパラバスとアトニストの対決ではなく、目に見えない、人から人へと感染していくジェス・グルーがパルマコンとして描かれていることに焦点をあてて考察する。ジェス・グルーは、テキストの中の、薬と毒、善と悪、過去と現在との境界を攪乱していき、アメリカ文化と、アフリカン・アメリカンの文化をともに批判する諸刃の剣となる。さらに、この作品の中の、メディアとハイチもまた、パルマコンとして、真と偽、生と死、現前と不在の境界を攪乱していく。すなわち、テキストに書き込まれたこれらのパルマコンは、「マンボ・ジャンボ」という語が「ちんぷんかんぷん」を意味する語へと変容されたことを逆手にとって、この語を再魔術化し、テキストの中の言説の一つ一つが「マンボ・ジャンボ」であるかのように見せかける。その結果として、『マンボ・ジャンボ』は、意味不明であるかのように見せかけた空間において、アメリカの進歩の犠牲となった「幽霊について幽霊に対して幽霊とともに語る」テキストとなる。

〔結論〕

以上の考察から、アフリカン・アメリカンの文学の中にフォークロアを書き込むことは、曖昧で矛盾の多いフォークロアを文字言語に変換して記述するという脱魔術化であり、その脱魔術化を通して、テキストの中に、口承性と文字言語の間のアポリアが創造され、フォークロアが再魔術化されることが明らかになる。すなわち、フォークロアと文字言語という二項対立を脱構築することによって創造されたアポリアにおいて、フォークロアは再魔術化され、文字言語もまた、読者を攪乱する力を付与される。このダイナミズムが、フォークロアが書き込まれたアフリカン・アメリカンの文学において、可視化される。このような攪乱は、デリダがハムレットの台詞を引用して説明する「時間の関節をはずす」こととしてとらえることができる。ボードリヤール、ベネディクト・アンダーソン、ネグリ＝ハートが説明する、現実と非現実の

区別がなしくずしになり、テロリズムがウィルスのように拡散していく現代社会に関する言説の中に幽霊や亡霊が用いられることもまた、この「時間の関節をはずす」試みとしてとらえることができる。さらに重要な点は、アフリカン・アメリカン作家にとっては、これらの幽霊や亡霊が、彼らが祖先から受け継いできた「信用できない知識」のひとつであることである。アポリアにおいて再び活力を付与される、フォークロアが本来持っている創造性は、読者を攪乱し、アメリカの「正義」への異議申し立てから彼らの目を逸らせるための装置として再占有される。以上の考察は、現代社会と親和性を持つ再魔術化されたフォークロアを、再魔術化された現代社会を照射する新たな知として位置づける。

論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文“Reenchanting Folklore: Aporia and Creativity in the Works of Zora Neale Hurston, Toni Morrison, and Ishmael Reed”は、アフリカ系アメリカ文学において重要な役割を果たしてきたフォークロアに着目し、フォークロアが文字言語に変換されてテキストに書き込まれることにより生じる曖昧性や矛盾が、いかに創造的なアポリアを生成してきたかを綿密に論証した野心的な論考である。過去への郷愁や祖先から継承してきた文化遺産の豊かさを殊更強調するのではなく、ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアの「シグニファイニン(グ)」の概念を発展させ、ゾラ・ニール・ハーストンの『驃馬とひと』、『わが馬よ、語れ』、トニ・モリソンの『タール・ベイビー』、『ソロモンの歌』、イシュメル・リードの『マンボ・ジャンボ』といった、従来のアフリカ系アメリカ文学研究において等閑視されてきた難解なテキストを取上げて俎上に載せ、フォークロアの口承性がいかにテキスト空間に豊饒な攪乱と揺らぎをもたらしたかを、鮮やかに浮き彫りにしている。最先端の文学・文化研究の方法論に依拠しつつ、ジャンル混淆的な多様かつ曖昧なテキストが生み出すアポリアを、「信用できない知識」の「脱魔術化/再魔術化」といった斬新な視座から読み解こうとしたその試みは、緻密なテキストの読みに裏打ちされた各章の具体的な議論を経て、説得力のある結論に収斂している。

本論文は、序章と結論を含めて、以下の7章から成り立っている。

- [序章] アフリカン・アメリカン文学とフォークロア
- [第1章] テキストの攪乱——フォークロアが創造するアポリア
- [第2章] ヴァナキュラーの再コード化——ゾラ・ニール・ハーストンの『驃馬とひと』における曖昧性
- [第3章] 毘を仕掛ける——トニ・モリソンの『タール・ベイビー』における隠蔽されたフォークロア
- [第4章] 「信用できない知識」の再魔術化——トニ・モリソンの『ソロモンの歌』におけるアポリアの創造
- [第5章] 「比較の亡霊」を呼び起こす——ゾラ・ニール・ハーストンの『わが馬よ、語れ』におけるヴードゥーの表象不可能性

〔第6章〕 「マンボ・ジャンボ」の再占有——イシュメル・リードの『マンボ・ジャンボ』におけるパルマコンとしてのジェス・グルー

〔結論〕

序章では、「多様で変化に富むアメリカ社会において、代わらず受け継がれてきたアフリカン・アメリカンの民族伝統」という、ラルフ・エリソンに代表される従来のフォークロアに対する見解がまず批判的に考察される。そして、トニ・モリソンの『ソロモンの歌』の結末においてミルクマンが空を飛ぶことの曖昧性を指摘する批評家は多いにもかかわらず、その曖昧性がどのようにテキストの中に創造され、読者を攪乱するための戦略として用いられているかを分析する先行研究が以外と少ないことが指摘される。こうした状況を踏まえ、筆者は、善と悪、生と死、現実と非現実といった境界を越境するフォークロアの口承性が、文字言語に変換されることによってテキスト空間に生じる曖昧性や矛盾に着眼することこそが、新たな読みを可能にするという本論文の基本的立場を明らかにする。

第1章においては、本論の方法論として、ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアの「シグニファイニン (グ)」の概念に考察が加えられるが、その過程で、ゲイツが具体的な作品分析に際して、口承性と文字言語の間の「アポリア」については必ずしも十分踏み込んでいないという事実が指摘される。そのうえで、アフリカン・アメリカンのフォークロア「シグニファイニング・モンキー」に依拠しつつ、「シグニファイニン (グ)」は、「攪乱を起こすために、2つのものをぶつけ合わせる」と再定義することが妥当であるという見解が導かれる。このように本章では、曖昧性を逆手に取り、ゲイツの「シグニファイニン (グ)」の概念をさらに洗練されたものへと転用することにより、フォークロアと文学が邂逅することにより創造されたアポリアが、いかに読者を攪乱するかという本論の問題意識が明確に提示されている。そのような観点から、本章においては、俎上に載せられる5つのテキストへの導入が円滑になされている。

第2章は、先行研究において、ゾラ・ニール・ハーストの『騾馬とひと』が、フォークロア集とみなされ、その曖昧性、不統一が批判されてきたことに異議を申し立て、語り手のパフォーマンスや聴衆の反応が書かれているフォークロアとフォークロアの間に挿入された人々の会話や序論といった一見付け足しに見える部分こそが、書き手と語り手や、真と偽の境界の曖昧化という点において焦点化されるべきだと主張する。そこから明らかになるのは、これらを書き込むことがいかにアフリカン・アメリカンの「ヴァナキュラー」を表象しているかという論点である。ハーストンが「アフリカン・アメリカンの表現の特徴」というエッセイにおいて、その特徴として説明している“*Ambiguity, Angularity, Asymmetry*”、すなわち、「曖昧性、ぎこちなさ、非対称性」に着目することにより、本章は、フォークロアを文字に変換するという語り手の試みそのものが、白人読者の攪乱のためのヴァナキュラーの再コード化であるという創見に満ちた見解を提示している。

トニ・モリソンの『タール・ベイビー』を論じた第3章は、とりわけ本論文のアプローチが作品分析によく活かされた章である。この作品のタイトルが、アフリカン・アメリカンのフォークロアの中でも最も有名なものの一つと同じであり、作品中でもそのことに言及されているために、このフォークロアの書き換えとして考察されてきたという経緯をまず確認したうえで、筆者はこのタイトルやタール・ベイビーについての言及を、ジャディーンとサンとの恋の物語に読者を惹き付けるための罫として指定する。そして、このフォークロアに隠蔽された「歌う骨」というフォークロアこそが、召使オンディーンが女主人の秘密を暴露し、支配関係を転覆する物語であることを論証していく。その過程において、このフォークロアが、この作品の舞台となっているカリブ海域を侵略したヨーロッパ列強やアメリカを密かに糾弾していることが解明されていく。このようなアメリカの正義に対する異議申し立て、ひいては「帝国」アメリカへの逆襲という新たな文脈において、本章は、これまで必ずしも十分評価されてこなかったこの作品の意義を鮮やかに描出することに成功している。

同じくトニ・モリソンの『ソロモンの歌』を分析した第4章は、ミルクマンが最後に飛翔するこの作品に秘められたモリソンの戦略を炙り出している。人間の飛翔と、それを「信用できない知識」とみなす科学的思考とをぶつけ合わせるによりテキストのなかにアポリアを創造することを、読者攪乱の戦略と見なす著者は、テキストに書き込まれたもう1つのフォークロア、「ライナの物語」を前景化し、飛翔によって残された者たちの苦悩に光を当てる。そこでは、飛翔という先祖伝来の文化遺産を受け継ぐ責任ある行為が、逆に社会で果たすべき責任を放棄するという意味において、新たなアポリアを生み出すことが指摘される。ジョージ・リッツアーの「脱魔術化」、「再魔術化」という概念に依拠しつつ、筆者は、魔術化された「信用できない知識」としてのミルクマンの飛翔が、その曖昧性により読者を惹き付けるのみならず、公民権運動が活性化した60年代の政治状況をもテキスト空間に混入させる巧妙な装置であったという斬新な結論を導き出す。

以上の二つのモリソン論を継承するかたちで、第5章は、再びゾラ・ニール・ハーストンを取り上げ、ジャンルを同定することが困難であるがゆえにしばしば酷評されてきた『わが馬よ、語れ』の境界横断的な異種混淆性に鋭い分析のメスを入れている。秘密性の強いヴードゥーを文字にして書き記すという語り手の取り組みが、テキストをヴードゥーの表象不可能性との闘争の場に行っているという主張は、リッツアーの「再魔術化」に加え、ベネディクト・アンダーソンの言う「比較の亡霊」としてのアメリカという概念を導入することにより、いっそう鮮明になる。そこで浮き彫りになるのは、自らがハイチやジャマイカの人々と一線を画するアメリカ人であるというスタンスと、アメリカにおいては自分が彼ら同様に周縁化されたアフリカン・アメリカンであるという紛れもない事実の間で宙吊りになる語り手の揺らぎである。脱魔術化されたアメリカに生まれ育った語り手のヴードゥーとの出会いは、ヴードゥーと科学が逆説的に織り成す「脱魔術化/再魔術化」の重合を可視化し、本論を「進歩」の語り直しという新たな論点へと接合する。

イシュメル・リードの『マンボ・ジャンボ』を詳細に分析した第6章は、従来議論されてきたパパラバスとアトニストの対決ではなく、人から人へと感染していく不可視のジェス・グルーのパルマコン性そのものに着目し、いかにそれが、アメリカ文化とアフリカン・アメリカンの文化をとともに批判する諸刃の剣となるかを論じた好論である。ジェス・グルーは、テキストにおける善と悪、過去と現在、薬と毒といった境界を攪乱するのみならず、本来対極をなすメディアとハイチの「脱魔術化/再魔術化」とも相まって、真と偽、生と死、現前と不在の境界をも攪乱していく。「マンボ・ジャンボ」という語が「ちんぷんかんぷん」を意味する語へと転用されたことを逆手にとり、この語が「再魔術化」され、テキストの多様な言説が意味不明の「マンボ・ジャンボ」であるかのように偽装していることを論じたうえで、筆者は、この仕掛けがアメリカの進歩の犠牲となった「幽霊について幽霊に対して幽霊とともに語る」ため、いかに再占有されてきたか、その軌跡を丹念に辿っている。

以上の議論を踏まえ、結論部分においては、次のような知見が導き出される。曖昧で矛盾の多いフォークロアを文字言語に変換して記述するということは、「脱魔術化」であり、それを通してフォークロアは「再魔術化」される。フォークロアが書き込まれたテキストもまた、口承と文字言語の間のアポリアが創造されるために、「再魔術化」される。そのような意味において、フォークロアとそれが書き込まれたテキストが互いに「再魔術化」しあうダイナミックな交渉が、アフリカ系アメリカ文学の特質をなしている。このように祖先から受け継いできた「信用できない知識」としてのフォークロアの創造性は、複雑なかたちでテキストを攪乱し、その曖昧性が多様な亡霊を巻き込みつつアメリカの「正義」への異議申し立てを偽装するための装置として再占有される。こうした見解は、フォークロアを過去の遺産と見なすのではなく、矛盾を孕んだそのダイナミズムを現代社会との親和的な関係性において捉え、「再魔術化」された現代社会を照射する新たな知として位置づける点において非常に独創的であり、その主張は説得力に富む。

専ら抵抗の文学というコンテクストで論じられることの多かったアフリカ系アメリカ文学のテキストを、理論的な枠組みとして脱構築理論と現代文化理論をうまく接合しつつ読み解いた本論の試みは、曖昧性と異種混淆性ゆえにこれまで十分評価されてこなかったテキストの魅力を鮮やかに照射することに成功している。文学におけるフォークロアを受容と転用という点で新領域を切り拓く雄大な構想と創見に満ちた本論文は、アメリカ文学・文化研究において多大な学術的貢献を果すものである。従前の黒人文学研究の成果を十分に取り入れつつ、緻密なテキストの読み直しを通じて、アフリカ系アメリカ文学をポストモダン文学へと接合しようとする本研究は、現代アメリカ文学研究の地平の開拓に果敢に挑む論考として高く評価できる。

とは言え、審査の過程において、今後の課題として、審査委員より次のような指摘もなされた。まず、通過不能なものの通過としてのアポリアを、他者との関係性においてももう少しダイナミックに捉えてもよかったのではなかったか。アフリカ系アメリカ文学の戦略である「読者の攪乱」についても、年代の異な

るテキストを一律に議論するのではなく、通時的観点を導入すればさらに論が深まったであろう。また、英語に関して散見された表記ミスに関しては、今後さらなる研鑽を積み、正確を期すことが切に求められる。

これらの指摘については、口頭試問において誠実かつ丁寧な応答がなされ、筆者が自らの論を自家薬籠中のものとしてよく咀嚼しているのみならず、問題の所在についても十分自覚していることが明らかになった。とりわけアポリアの反復に関する質疑に対して、それが単に曖昧性を助長するのではなく、反復によって生じるズレこそが「創造性」を生み出すという筆者の見解は説得力をもつ。口頭試問の応答からも、筆者が、当該分野の批評動向に精通しているばかりでなく、極めて高度のプレゼンテーション能力を有し、研究者として十分な資質を備えていることが窺えた。

先に触れた課題は、今後のアフリカ系アメリカ文学研究の動向に大きな影響を与える本論文の射程の大きさと表裏一体をなしていることもまた事実であり、本論文の学術的意義を本質的に減じるものではない。難解なテキストと膨大な先行論文を実によく読みこなし、最新の批評理論に依拠しつつ、新機軸を打ち出した本論文が、学術性と独創性に富む論考であることは、既に本論文の半分以上の章が、審査を経て日本アメリカ文学会の全国大会において口頭発表され、かつまた計四本の論文が、ジャッジ付きの学会機関誌『アメリカ文学研究』、『関西アメリカ文学』に掲載されたことが何よりも雄弁に物語っている。研究業績表を見れば明らかなように、学会発表、シンポジウム等を通じて自らの研究成果を積極的に提示し、4年連続で研究論文が学会誌に掲載されてきた筆者の粘り強い努力と力量は大いに評価されねばならない。

これらを総合的に判断し、本審査委員会は、本博士号請求論文が、博士(言語文化学)の称号を与えるのに相応しい業績であるとの結論に達した。